

ったポジションは取り戻せません。あんなに
 がんばってきたのに投手失格です。罪人にで
 もされたかのような気持ちでした。
 ●●大会の準決勝のときです。チャンスが
 訪れました。先発の調子が悪く、リリーフで
 投げることになりました。「相手打線を押さ
 えられれば：：」。お釈迦様がカンダタに垂
 らした蜘蛛の糸がこの登板でした。蜘蛛の糸
 を上るカンダタのように一生懸命投げました
 三回、四回と逆転は許していません。
 そして最終回、わたしたちのチームは一点
 リードしています。この回を抑えれば、決勝
 戦で先発できるかもしれない。あと三人をア
 ウトにすれば勝てる。最初のバッターはシヨ
 ートゴロでした。「あと二人！」、そう思っ
 た瞬間、エラーです。次のバッターはライオ
 フライでした。またもエラーです。ノーアウト
 ト二三塁。ヒット一本で逆転負けです。
 エラーをした仲間が、細い蜘蛛の糸にぶら
 下がる罪人たちのように思えました。「足を

引っ張るな」。次の一球を投げました。スク
 イズです。三塁前にボールが転がりました。
 ボールを捕ろうとしていた三塁手を突き飛ば
 しました。そして、自らの手でボールを捕り、
 ホットメがけて投げました。しかし、バック
 ネット直撃の暴投でした。その間に二塁ラン
 ナーがホームを踏みました。逆転負けでした。
 「おまえたちなんか信頼できない。邪魔だ、
 どけ！」。そう思った瞬間のエラーでした。
 カンダタが「下りろ」と叫んだ瞬間、
 蜘蛛の糸が切れたのと同じです。しかし、カ
 ンダタの糸にぶら下がっていたのは見ず知ら
 ずの罪人たちです。わたしの後ろにいたのは
 チームメイトです。そのとき、わたしの姿は
 カンダタよりもみにくかったと思います。
 『蜘蛛の糸』を読んで、野球に夢中になって
 いた小学生時代を思い出しました。あのとき
 仲間を信頼していれば……。勝ったか負けた
 かはわかりませんが、後悔を引きずることは
 なかったでしょう。